

A 古今和歌集卷十五より

五條(ごでう)のきさいのみやのたいにすみけるひとに ほん意にはあらでものいひわたりけるを
 こてう(こてう)のきさいの宮のたいにすみけるひとに ほん意にはあらでものいひわたりけるを
 正月十日 正(しょう)月(げつ)十日(じゅうにち) 正(しょう)月(げつ)十日(じゅうにち) 正(しょう)月(げつ)十日(じゅうにち) 正(しょう)月(げつ)十日(じゅうにち)
 むつきのとをかあまりになむ ほかへかくれにける ありところはききけれど えものい
 はて またのとしのはる むめのはなさかりに つきのおもしろかりけるよる こそを
 こひてかのにしのたいにゆきてつきのかたふくまで あはらなるいたしきに ふせりて
 恋(こひ)い 西(にし)対(たい)行(ゆ) 月(つき) 願(ねが)ぶ 荒(あ)あぜ 板敷(いたじき) 伏(ふ)せりて
 よめる 在原業平

つきやあらぬはるやむかしのはるならぬわかみひとつはもとのみにして
 月(つき) 春(はる) 昔(むかし) 春(はる) 我身(わがみ) 元(もと) 身(み) 在原業平

私訳 古今和歌集卷十五より

五條の后(ごでう)(文徳天皇の母、藤原順子)の宮の対にお住みになっていた方に、愛しては
 いけないと知りながらどうしようもなく深く愛して通い詰めていたところ、正月の十
 日を過ぎた頃、どこかへ隠れておしまいになり、行先は分かっていたけれど、殿上人で
 ないかぎり行けるところではなく、翌年の春、梅の花が咲き誇る頃、月も見頃の夜、過
 ぎし日々の恋しさのあまり あゝ西の対に行き、月が沈んで行くときまで、荒れ果てた
 家の板敷(いたじき)に蹲(うずくま)って 一首読んだ。
 在原業平

月やあらぬ春やむかしの春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

(月よ、お前は昔のままの月なのか、春は去年のままの春ではないのか 私の身だけは去年と変
 わらないのだよ)

伊勢物語 四段

むかし ひむがしのこてうに おほきさい(おほきさい)のみやおはしましける にしのたいにすむひと
 ありけり それをほいにはあらてこころざし(こころざし)ふかかりけるひと ゆきとふらひけるをむ
 つきのとをかはかりのほどに ほかにかくれにけり ありところはきけと ひとつのいきか
 よふへ(よふへ)きところにもあらさりければ なほうしとおもひつなむありける またのとしの
 むつきに むめのはなさかりに こそをこひていきて たちてみ、ゐてみ みれと こそ

に^似るへくもあらず うち^泣なきて あはらなるいたしきに つき^月のかたふくまでふせりて
 去^年を^思ひ^出てて よ^詠める

つきやあらぬはるやむかしのはるならぬ わかみひとつはもとのみにして
 とよみて よ^夜るのほのほのとあくるに ^泣なく^泣なくかへりにけり

私訳伊勢物語四段

むかし、東の京五条に^{おほきさい}大后の宮がお住まい立ったお邸の、その西の対の家（別棟）に住
 んでいる人がいた。

彼女を愛してはいけなさと知りつつ深く愛してしまい、通い詰める男がいたが、彼女^{そのひと}は正
 月の十日を過ぎたころ、どこかへ行ってしまった。

行先^{ゆくへ}は、見当はついていないが、並の人間の行き通いできるところではなかったたので、そう
 であればなお、心は憂^{うれ}うるばかりで、彼女を思い続けているのだった。

翌^{よくとし}年の正月、梅の花も満開となれば、去年のこともが恋しく思い出され、主人^{あるじ}なき空き
 家へ行き、立っては月を眺め、座っては梅を見つめ、そうして見ているとますます去年と今
 年のちがいに心が痛むのだった。

たまらず涙し、むせびながら、この荒屋^{あばや}の板敷に、月が沈むまで 蹲^{うすくま}り過ぎ去った時を思
 い出して、

月やあらぬ春や昔の春ならぬ我が身ひとつはもとの身にして

と詠んで、朝ぼらけほのぼのと明けて行くころ、涙ながらに帰途についたのだった。

B 伊勢物語六段

むかしをとこありけり をんなのえうましかりけるを とし^年をへてよはひわたりけるを
 からうしてぬすみ^出てて いとくらきにきけり あくたがはといふかはを^率みていきければ
 くさ^草のうへのおきたりけるつゆを かれはなんぞ となむとひける ゆくさきとほく^夜よ
 もふけにければ おにあるところもしらて かみさへいといみしうなり あめもいたう^雨
 降りければ あはらなるくらにをんなをおくにおしいれて をとこ ゆみ やなくひを^{胡蝶のなぐい}
 おひて とくち^負にをり はやよもあけなむとおもひつづつみたりけるに おにはやひとくち^{一口}
 にくひてけり あなやといひけれと かみなるさはきにえきかさりけり やうやうよも^夜

明けゆく見に みれば率 みて来こしをんなもなし あしすりを足して指なけともかひなし
しらたまかな白んそとひと人のとひしとき露つゆとこたへ答て必きえなましものを

これは二條の後のいとこの女御の御もとに仕うまつるやうにてゐ給へるを かたちのいと
めてたくおはしければ 盗みて負ひて出でたりけるを 御兄弟堀河の大臣太郎國経の大納
言言まだ下臈げらふにて内へまゐり給ふに、いみじう泣く人あるを聞きつけて、とどめてとりかへし
給うてけり それをかく鬼とはいふなりけり まだいと若うてただにおはしける時とや

私訳伊勢物語六段

むかし、一人の男がいた。身分のちがう女を愛し、何年も通い詰めていたが、とうとう盗
み出そうと決心し、真つ暗ななかを逃げ出してきた。あたりは闇。芥川という川のあるとこ
ろまで連れ立ってきたところ、女は草の上にある露を指して「あれはなに」などと尋ねるの
だった。目的地はまだ遠い、夜も更けてきた、この辺は鬼が出没するところだとふたりは知
らない、雷が激しく鳴って雨がひどく降り出した。荒れた蔵があったので、女をそこへ雨宿
りさせ、男は弓を持ち胡籙やまぐちを背負いなおして戸口の見張りをすることにした。もうすぐ夜が
明けてくるな、と思っていると、鬼はがぶりとひとくちで女を食ってしまった。女はあれつ
と叫んだが、雷鳴の大きい音に掻き消され、男には聞こえなかった。ようやく夜が明けてき
た、朝だよと、蔵の中を見れば、女はいない、男は地団駄を踏んで悔しがり、泣き叫んだが
もうどうしようもなかった。

白玉かなんぞとひと人のとひしとき露 つゆとこたへ答て必きえなましものを

(あのとときあの女ひとがあれはなに、きれいな玉みたいだわ、と言ったとき、あれは露ですと答
えて露となって消えてしまえばよかった)

C 参考図版メモ

伝宗達 「伊勢物語色紙(四段)」「西の対」紙本着色 24.5x21.2cm MOA美術館蔵

伝宗達 「伊勢物語色紙(六段)」「芥川」紙本着色 24.6x20.8cm 大和文華館蔵

宗達 「源氏物語濔標関屋図屏風」紙本金地着色 各 152.3x355.6cm 静嘉堂文庫美術館蔵